

10/24 日本航空大学校がチャーターフライトを実施
帯広北高校の生徒約 120 人が空へ

日本航空大学校が、高校生を乗せたチャーター便を運航しました。AIRDOの協力で実施され、キャビンアテンダントやグランドスタッフに同校の卒業生を配置。帯広北高校の生徒など約 120 人を乗せ新千歳空港を離陸し、約 50 分間、札幌上空などを飛行しました。最初は緊張気味に搭乗したという生徒の松崎 花鈴さんは「キャビンアテンダントの方が優しく笑顔で接してくれたので、緊張がほぐれて楽しむことができました」と話しました。日本航空大学校と帯広北高校は、高専連携によって職業人を育成する事業が文部科学省によって採択されたことを受け、航空人材育成のための教育プログラムを昨年 9 月から開始しています。チャーターフライトはその一貫として、生徒に航空への興味を持ってもらおうと実施したものです。



10/22 千歳市全児童館・学童クラブ合同 秋まつり
手作りゲームでお出迎え



市内 11 か所の児童館と 18 か所の学童クラブが合同で開催する《秋まつり》が、花園コミュニティセンターで開かれ、親子など多くの来場者で賑わいました。秋まつりは新型コロナウイルス感染症の影響で 5 年ぶりの開催。オープニングではくす玉が割られ、大歓声とともにスタートしました。1 階には職員が手作りしたゲームが所狭しと並び、2 階では市内の人形劇団《かざぐるま》による《3匹のこぶた》の公演も。会場は、ゲームや人形劇を楽しむ子どもたちの笑顔であふれていました。月に数回、ランドセル来館であじゅ児童館に通っている佐藤 蒼さんは、ボールを投げてピンボールのように得点を競う《ピンポンパン》がお気に入りとし、「ちょっとドキドキしたけど楽しかった」と笑顔を見せました。

10/1 千歳市民の台所
千歳市場まつり



市場の活性化を目的に《千歳市場まつり 2023》を公設卸売市場で開催しました。朝 8 時のオープン前からできた 200 人以上の行列は、開場とともに目当てのコーナーへ進み、会場は大きな買い物袋をいくつも抱えた来場者で溢れました。来場者からは、「たくさん買って子どもたちに配るのが楽しみ。おいしくて安い果物をたくさん買って食べるのが楽しみ」などの会話が聞こえてきました。当日は、野菜や果物、水産物、きのこの販売のほか、千歳高等学校の生徒たちが地元企業の協力を得て開発したコッペサンドも人気があり、完売して喜ぶ生徒たちの笑顔が印象的でした。このほか、マグロの解体ショーや果物の模擬せりなどで盛り上がりとともに、いくら丼や海鮮焼き、キッチンカーでの飲食なども終始にぎわっていました。



10/14 くらしに役立つ知識を深めた
ちとせ消費者まつり



展示や体験などを通じ、消費生活や環境問題などについて、子どもから大人まで楽しく学ぶ機会とすることを目的に開催された《ちとせ消費者まつり》に、多くの方が訪れました。今年は《暮らしの中から考えようSDGs～つくる責任・つかう責任～》をテーマに、家族みんなで楽しめる体験コーナー、とれたて野菜や手作りスイーツの販売のほか、カーボンニュートラルに関する展示などが行われました。中でも子どもたちでにぎわっていたのは《環境かるた》。エコに関するかるたで、ゲームを楽しみながら環境について学んでいました。

10/17 秋の市民火災予防運動
やまとの里で消防訓練



秋の市民火災予防運動の一環として、《特別養護老人ホーム やまとの里》で消防訓練を行いました。この時期は、暖房機器の使用などにより火災が発生しやすいことから、市民への防火思想の普及啓発により、火災の発生を防止し、火災による死者の発生を減少させるとともに、財産の損失を防ぐことを目的に運動を展開しています。今回の訓練は、災害時における迅速な避難誘導・救助活動が円滑に行えるよう、2階からの出火を想定し、はしご車による高所救出・放水などを行いました。

人々のうごき

《総人口》
98,074 人 (+59)
男性 49,838 人 (+33)
女性 48,236 人 (+26)
《世帯》52,252 世帯 (+71)

()内は、前月との比較です。

11.1 現在

広報ちとせからのお知らせ

広報ちとせの発行日は毎月 10 日です。この日までに届かないときは、次の番号にご連絡ください。なお、町内会に加入しているしついないを問いません。

広報広聴課 広報係
☎(24)0104 FAX(22)8851

Vol.07 北海第1号着陸 熱狂する村民

Chitose Airport 100th anniversary

大正 15 年 10 月 22 日、札幌飛行場から一機の飛行機が離陸しました。向かう先は千歳村。村民たちが汗を流し、鋸と鍬で造成した、手づくりの着陸場です。

その頃、千歳村では、飛行機を一目見ようと朝早くから着陸場の周りに人だかりができていました。その数なんと約 1 万人。当時の小樽新聞は、その様子を「地上に起る万歳の声 熱狂する村民蝟集(群衆)」と記しています。

そして、午後 1 時過ぎ。その飛行機は千歳の空に姿を現し、歓迎に呼応するかのように小樽新聞社の宣伝ビラをまきながら旋回したのち、着陸場に進入してきました。

飛行機がフワリと鮮やかに着陸すると、大歓声に迎えられ、3 人の人物が降機してきました。小樽新聞社の野中機関士、宮古写真班員、そして酒井憲次郎操縦士です。

渡部栄蔵の証言(「趣味のチトセ郷土史」)より
・・・やがて小樽新聞社の飛行機は、小粒のように見え、次第に鳥の大きさになりグングン頭上に近づいて来ました。歓呼は怒涛のように上がり、感激に堪えるように大きく輪をいくたびか描いて、グンと機首を下げ、部落民の造った着陸場へ、なんの支障もなく見事に着陸しました。その時は心からヤレヤレと安心すると、ゾクゾクと嬉しさがこみあげ、ふと臉があつくなる思いになりました。

百年物語

手づくりの着陸場から新千歳空港へ
開港 100 年の歴史を振り返る